

豊田市美術館「ソフィ・カルー最後のとき／最初のとき」

会期：2015年10月10日(土)－12月6日(日)

松田 愛

豊田市美術館で「ソフィ・カルー最後のとき／最初のとき」展を見た。同館での彼女の個展は2003年以来となる。今回と同じタイトルのカルの個展は、2013年の原美術館や、海外でも数カ所で開催されている。しかし、盲目をテーマとする初期の代表作〈盲目の人々〉(1986年)シリーズと一緒に展示されたのは、今回の豊田市美術館での個展が初めてであろう¹。そのため、本展は、「見ること」について思索したカルの3つのシリーズを、一堂に見ることのできる貴重な機会となった。

生まれつき目の見えない人々に、彼らにとっての「美しいものとは何か」を尋ねる〈盲目の人々〉全23点、イスタンブールで出会った盲目の人々に、彼らが最後に見たものを尋ねた〈最後に見たもの〉(2010年)全13点、そして同じくイスタンブールの街で、一度も海を見たことのない人々に海を見てもらい、その最初のときを撮影した〈海を見る〉(2011年)が、8面のスクリーンからなる映像・音響インスタレーションとして展示された²。どれもカルが一貫して追求し続けてきた、「見ること」あるいは「見えないもの」に関わっている。会場で配布された展覧会リーフレットによれば、本展は、「カルが長年にわたって探求してきた「見ることとは何か」というテーマに関する3つのシリーズ作品を、豊田市美術館の空間にあわせて構成したものとある³。したがって、本論では、〈盲目の人々〉から〈海を見る〉に至るまで、カルの関心がどのように発展していったのか、3シリーズは、互いにどのように関連し合っているのかを探りたい。

天井が高く、最も大きな第1展示室には、豊田市美術館が所蔵する〈盲目の人々〉23点が展示されていた。それぞれ盲目の人のモノクロによるポートレートと、彼らが答えた内容のテキスト、そしてその内容を表した写真の3点組で構成される。イメージを表した写真は、モノクロームの2点をのぞき、全てカラー写真である。最初の男性の回答が印象的である。「私が見た最も美しいもの、それは

海です。視野の果てまで広がる海です。」そこには光に輝く海を写した写真が添えられている。俳優、水中を泳ぐ魚、絵画、白や青、緑など色彩について言及する者、自分の家や部屋、生活をともにする男性、息子など、身近な物や大切な人々について語る者など、彼らの回答は様々である。結婚式で、白い杖でアーチをつくってもらった男性は、そこを通った人々から、「この白い杖はどれもとても美しい」と聞かされる。その言葉に対応する写真は、白い杖を同じく白い棚の上に載せ、丁寧に撮られたものであることがわかる。そうかと思えば、少しぼやけて見える写真や、引き伸ばされたような粗さを見せる写真もある。これらの写真はカルによって撮影されたものもあれば、そうではないものも含まれる。これらの写真が実際にどこから来たものかは明らかにされていない。しかし、少なくともカルによって集められ、選ばれたイメージである。それらは、カルと彼らの間で取り交わされた対話の証として存在することで、来歴や真正性を強調するというよりも、親しみや親密さを放っているように見える⁴。その意味で、写真は棚に立て掛けられた仮設性や一時性と同時に、カルと盲目の人々を結びつける、唯一性をはらんだものとして立ち現れる。それは、複数の可能性へと開かれた唯一性であり、私達の生の様態そのものとも言える。距離と親密さのこの妙なバランスこそが、カルの作品の大きな特徴であるといえよう。

ここで彼らが語る美は、その多くが、周囲から聞いた話や、彼らの体験、また記憶と結びついている。それは、母や息子、恋人や夫など、かけがえない親しい人々とのつながりと切り離すことができない。美は普遍的なものとしてではなく、周囲の人々や慣れ親しんだ環境との結びつきから生まれているのである。

続く〈最後に見たもの〉の一連のシリーズは、盲目というテーマや、インタビューという手法、そしてポートレートと語り、イメージを表した写真からなる3点組であること

など、〈盲目の人々〉と共通する要素を多く持つ。しかし、大きく異なるのは、彼らが人生の途中で失明した人々であることだ。人物達は、〈盲目の人々〉のように、顔だけが正面観で固定されるのではなく、斜めを向く者、横向きの者、顔を覆う者など、様々な動きが感じられる。展示全体が流れるように構成されていることも本シリーズの特徴である。1つの作品は、決められた大きさの枠内に収められ、いくつかパターンは見られるものの、ポートレートと彼らが語った内容を示す写真は、各々で大きさが異なり、配置の仕方も異なる。「盲目の人とリボルバー」では、彼が語る身振りが、まるで映画を見るように3つのシークエンスにわたって展開される。それらは実際、彼らのポートレートの延長となっている。彼らのポートレートはどれも、庭の緑や、部屋の壁紙、広がる海など、彼らを取り巻く日常風景と一緒に写り込んでいる。彼らは淡々と、まるで日常の一部であるかのように、彼らの「最後に見たもの」を語っている。そのような語り、不意の失明の衝撃を多少なりとも緩和しているように思う。「最後のとき」とは、記憶のイメージに他ならず、その記憶すら時とともに曖昧になっ

ていく。失明という痛み、記憶を失っていくことの痛み。カルは語っている。「最後のときというのは経験しているときはわからない。最後のときとは一体何だろうか。それはとても詩的なものに思えます⁵。」本来、見ることでできない他者の「最後のとき」を、カルは言葉と写真によって視覚化しようと試みる。写真のイメージは、〈盲目の人々〉の時と同じく、彼らの語りに対するカルの応答である。それと同時に、それらは彼らのポートレートの一部を構成している。それは文字通りに、彼らの手元や、彼ら自身であることもあれば、部屋の蛍光灯やソファなど、多くが彼らの生活の一部である。言葉とイメージを介して彼らの記憶に触れることが、カルにとって、また私達作品を見る者にとって、他者とつながる唯一の方法なのである。

最後の展示室は、イスタンブールの街で、海を見たことのない人々に海を見てもらい、その「最初のとき」を撮影した4分間の映像作品である。彼らの多くが、内陸部出身の貧しい人々であるという。老人、松葉杖の男、赤ん坊を抱く女性、少女など様々な人々がじっと海を見つめる後ろ姿を、波の音とともに撮影したものである。会場では、

1 〈盲目の人々〉1986年、カラー写真、テキスト、額、豊田市美術館蔵





2 〈最後に見たもの〉2010年、カラー写真、テキスト、額、13点組

7つの映像が大きく壁に投影され、一番奥の小さな部屋では、子供達の映像がモニターで上映されていた。彼らはゆっくりと振り返り、カメラ(私達)と対面する。前2つのシリーズが、インタビューという手法をとり、言葉を媒介とする対話が重要な要素となっていたのに対し、本シリーズに言葉は付けられていない。登場人物達は皆、静かに海を見つめている。見終わって振り返った後は、少し恥ずかしそうに笑う少女、じっとこちらを見つめる男性、ふと目を閉じる男性など様々であり、彼らの心の内を、私達は想像するしかない。最後はどの映像も、白い波に包まれるようにホワイトフェードしていく。ここでは、彼らとカル、あるいは私達をつなぐ媒介としてのテキストと写真が与えられる代わりに、展示室全体を満たす映像と音によって、「見ること」が直接的で身体的な経験として与えられる。最後の子供達の映像が、その身体性をストレートに物語る。子供達は、しばらくはじっと海を見た後、こちらを振り返るが、その役目が終わった途端、水に入り、水をかけ合ったり、追いかけたりしながらその場で遊び始めるのだ。

本作について、カルはインタビューで次のように語っている。「彼らが住んでいる場所から10キロ先にある、身近で、行こうと思えば行ける場所にある海、近くにあるのに見て

いなかった海を見せたかった。それによって「見ていない何か」「不在」、そして「欠如」がより強く感じられ、「視覚」が立ち現れると考えたのです⁶。」つまり、本作もまた、ある種の盲目を出発点としている。

盲目を通じて与えられた、「見ること」の親密で多彩な有り様は、他者の経験や記憶の多様性と唯一性に触れることで、一層の豊かさを獲得する。そして最後に、私達は見る眼差し、つまり「見ること」そのものと対面する。それは原初的ともいえる視覚の身体性への回帰に他ならない。豊田市美術館は、最後の展示室を出た後、光に満たされた廊下を進むと、再び第1展示室の前へと導かれる。終わりから始まりへ、寄せては返す波のように、私達の生もまた、奥深く豊かな可能性へと何度でも開かれていくのだ。

1 | 原美術館での同名の個展では、最初の展示室に、ソフィ・カル+杉本博司《盲目の人》(1999年)が展示されていた。こちらは《盲目の人々》のうち、「海」と答えた最初の人物に、杉本博司の《海景》を組み合わせた1点からなる作品である。本作品は、今回の豊田市美術館の個展でも、〈盲目の人々〉に続く第2展示室に展示された。

2 | 〈海を見る〉は、全部で14点の映像からなる。

3 | 都筑正敏「ソフィ・カル—見ることをめぐる三つの対話」ソフィ・カル展リーフレット、豊田市美術館、2015年。



3 〈海を見る〉2011年、映像・音響インスタレーション、4分、映像：キャロリーヌ・シャンプティエ

4 | 長谷川祐子は、カルが「彼らの答えに自分の想像力を重ね合わせて写真を撮り、あるいはイメージを集めた。これは彼女の仕事がいわゆるドキュメントの手法と根本的に異なるものであることを明示する仕事となった」ことを指摘している。長谷川祐子「Sophie Calle」『脱走する写真—11の新しい表現』水戸芸術館現代美術ギャラリー、1990年、167頁。

5 | ARTiTウェブサイト「記者会見録／ソフィ・カル展[原美術館]」（原美術館での個展に際し、2013年3月19日に同館で行われた記者会見）より、2013年4月9日掲載。<http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum/qLF39IUmDZfsV0e8RgvC> (2016年1月3日閲覧。)

6 | 「アーティスト・インタビュー ソフィ・カル」『美術手帖』第65巻985号、2013年6月、195頁。

全て「ソフィ・カル—最後のとき／最初のとき」豊田市美術館での展示風景、2015 写真：木奥 恵三